

恣意の空間と摂理の空間（その四）

——『序曲』（第一巻）の鳥の巢掠りの少年・覚え書き（三）——

松 下 千 吉

I

(1) 前稿の結びで、ルーシー・グレイが自然万象に臨在する神の霊に「死を見ずして」（『ヘブル書』一章五）帰一した孤独な霊として観じられていることにふれて、そこに、『創世記』や『ヘブル書』にみえるエノク、すなわち——「エノク神とともに歩みしが、神かれを取りたまひければ、おろすなりき」（And Enoch walked with God: and he was not; for God took him. — *Genesis*, 5: 24）——というエノクへの思いが暗にこめられているのではなからうか、ということ指摘しておいた。このエノクへの思いは、たとえば『序曲』第二巻の「私が自然とともに歩んだ日々あの敬虔な愛の霊を慈しみ育てようと、春と秋が、冬の雪、夏の木蔭が、はた、昼と夜、朝夕あしたべが…どんな恵みを与えてくれたかを、語るとすれば長くなろう…」(‘Twere long to tell What spring and autumn, what the winter snows, And what the summer shade, what day and night, The evening and the morning... supplied, to nurse That spirit of religious love in which I walked with

Nature. II. 372-377) という詩行などにもみられるように、ワーズワスの作品全体に、目立たないが、しかし深く滲透しているように思われる（以下引用中のイタリックは筆者）。が、より明白には、ワーズワス自身が、「不死の告知の頌歌」(*Ode: Intimations of Immortality*) の一節「感覚や外界の事物にたいする執拗な問いかけ、われらより落ちゆくものゝ消えゆくものゝ」(*those obstinate questionings Of sense and outward things, Fallings from us, vanishings*) にたいするフェニック女史筆録の自註 (Fenwick Notes) の中で、ふれている。すなわち、幼少時代に外なる現実の事物が客観的な存在とは思えなかったために、道端の石垣や木立ちに触れてみなければならなかったという、あの周知の体験に関連して言及しているのである。（ちなみに、あの「問いかけ」(*questionings*) は、少年が事物に問いかけるのか、事物が少年に問いかけるのか、両義にとれるという説もあるが、ここではいちおう少年の問いかけと解しておく。）^①

少年時代の私にとって、死というものが私自身という存在にも起こりうることだという観念を受け容れることほど困難なことではなかった。…それが私にとって難しいことだったのは、動物的な生気の躍動を感じるあまりというよりは、むしろ、私の内なる霊 (*the spirit within me*) の御し難い力強さを感じることに由来していたのである。私はいつもエノクやエリアのことを思っては瞑想にふけり、他人はどうであろうと、私自身は、彼らと同じ具合に、天に移されるのではないかと、ほとんど思い込んでしまうほどであった。こうした思いに似通う情感のゆえに (*with a feeling congenial to this*)、私はしばしば外なる事物を外界に存在するものと思うことができなかった。私の目にふれるものすべてにたいして、それらが、私自身を成り立たせている霊的本性 (*my own immaterial nature*) から遊離したものとしてではなくて、その本性に内在しているものとして、心を通わせ合ったものだった。登校の途中、しばしば、石垣や木立ちを把んでは、この底なしの観念的観想 (*idealism*) の淵から現実の世界に立ち返ろうとしたものだ。…幼少期に目にした事物を光被する、この夢のような鮮やかな光輝については、だれしも、幼時を回想すれば、証言できるであらう。^②

さらに、晩年のワーズワスからの直聞きとして伝えられる次の言葉も、よく知られている。

私の生涯のある時期に、外なる世界にそもそも事物が存在することを確かめるために、何か手ごたえのある物を押してみなければならぬときがあった。私には自分の精神は確実なものと思えたが、それ以外のすべてのものは、思惟の中へと落ちゆき、消え去っていった (fell away, and vanished into thought)。^④

これらの自註に語られている体験のもつ、そこではふれられていないより厳肅な面については、むしろ、あの「頌歌」において語られていて、「落ちゆくものら、消えゆくものら」につづく詩行の、「いまだ現実のものとして把握できない世界をさまよい歩く生き物の漠然たる不安・惑い、不意をおそわれた罪びとのように、われら現し身の性がその現れに畏れ慄くいと高き霊的本能」(Blank misgivings of a Creature Moving about in worlds not realized, High instincts, before which our mortal Nature Did tremble like a guilty thing surprised.) という言葉で敷衍されており、それはさらに、「われらの生涯を照らす光の泉、われらの観照をつかぎえる光」(the fountain light of all our day... a master light of all our seeing) たるべき「あの最初の情感、あのおぼろげな回想」(those first affections, Those shadowy recollections) の核心をなすものとして位置づけられている。ちなみに、「いまだ現実のものとして把握できない世界をさまよい歩く生き物の漠然たる不安、惑い」は、外界にたいする現実感覚が成長したのちも、内面的に変容しつつ、ワーズワスの生涯にわたってつきまとうものであって、「ティンタン寺院」の「あの神秘の重荷、この不可思議な全世界の重苦しい重荷」(the burthen of the mystery... the heavy and weary weight Of all this unintelligible world) にみられる神秘もその深化した様相のあらわれと考えられる。

ところで、上の自註の語る体験には、自然観照の在り方として、前稿でもみた『序曲』第二卷（四三二—四三五）の異稿の「万象が強大な全一体を成して神とともに存在しつつ、神と自然に包攝されてあるあの統一」(that unity In which all beings live with God, are lost In God and nature, in one mighty whole) という言葉にみられる思想体験の萌芽がみとめられ、さらにその根底には、これも前稿であれた『ヨハネ伝』（一七章二一—二二）の「あなたが私の中に在られ、私があなたの中に在りますように」(As thou, Father, art in me, and I in thee.) という言葉にみえる正統の神の観念の変奏が、ここでもみとめられるといえよう。

と、いうのは、『ティンタン寺院』の「思惟するものすべて、思惟・観照の対象たるものすべてを生動させる霊」(a spirit that impells All thinking things, all objects of all thought) という「想念」、およびその根底の一端にあると思われる『コリント前書』（二章一一）の「そのように、神のこころ（または思ふ）も、神の霊のほか知るものはない」(So also, no one knows the things (or thoughts) of God except the Spirit of God.) という「想念を念頭において考えるとき、エノクやエリアと同じように自己が天に移されるのではないか」ということは、少年の「霊的本性」に内在する自然の事物が少年の「思いの中へと（すなわち、思いと化して）」(into thought) 「落ちゆき、消えゆく」ように、神の霊に包攝されてある少年の存在が神の思惟の中へと落ちゆき、消えゆくことにほかならないからである。ちなみに、この「思いの中へ」というその思い (thought) は、前稿でみたクラークスン女史あての書簡の中の「神は霊である」(God is a spirit.) ことをめぐっての、息子との対話の一節「神はそなたの心の中の思いにいつそう似ているのだ」(more like his thoughts in his mind) における思いに（単複のちがいはあるが）通ずるものであろうし、自註の「思ふ」が「私の思ふ」(my thought) となっていないのは、たんに成句的な言い方というだけではなく、それが神の思惟、すなわち、すでに幾度か言

及した『序曲』第一卷の「宇宙の英知ある精霊、永遠の思惟たる魂」(Wisdom and Spirit of the universe: *Thou Soul that art the eternity of thought.* II. 428)の一端、あるいは一様態であるという配慮もあつてのことであらうか。

いずれにしても、そういう思想体験(幼少体験そのものではなくとも、それを意味づけする詩人の思想体験)の背後には、旧稿^④でもふれた『抒情踏謡集』の序文の「人間がそれによって感知・生動するあの偉大な根源たる喜びの原理」(the grand elementary principle of pleasure, by which he knows, and feels, and lives, and moves)という想念にも余韻をとどめている『使徒行伝』(一七章二八)の「われらは神の中に生き、動き、在るなればなり」(For, in Him we live, and move, and have our being.)という言葉、あるいは、『ローマ書』(一一章三二)の「すべてのものは神より出で、神を通して(または神によりて)、神に向かうがゆえに」(For from Him and through Him and to Him are all things.)ほか『コリント前書』(八章六)などにもみえる類似の言葉に典型的にあらわれた、万象を包攝する靈的原動者としての神の觀念がひかえていたと思われる。と同時に、自註におけるエノク同体観と自然の事物の内在観との間には、さきの『ヨハネ伝』の言葉にみられるのと相似の観点の重なり合い、二重性がみとめられるのであり、また、そう考えることによつてはじめて、自註の「こうした思いに似通う情感のゆえに」(with a feeling congenial to this)というその感受性を接点とした、エノク同体観と自然の事物の内在観との内面的な相関性もしくは表裏一体性が理解できるのではなからうか。

(2) このように表裏一体をなす観照の視点の二重性は、あの自註の場合と多少とも相似の様相を呈して、『序曲』でも一度ならずあらわれるのであり、四つのエピソードの当面のモチーフにもつながるものとしては、たとえば

第二巻の（三五九―三七一）または（四〇五―四三四）の詩節などもそうであるが、このうち後の一節はいずれ先でとりあげるはずであるので、前の一節、すなわち、ホークスヘッド近辺の湖畔をめぐる早朝散策の体験を語る一節をあげてみよう。

Nor seldom did I lift our cottage latch
Far earlier, and before the vernal thrush
Was audible, among the hills I sate
Alone, upon some jutting eminence
At the first hour of morning, when the Vale
Lay quiet in an utter solitude.
How shall I trace the history, where seek
The origin of what I then have felt ?
Oft in these moments such a holy calm
Did overspread my soul, that I forgot
That I had bodily eyes, and what I saw
Appear'd like something in myself, a dream,
A prospect in my mind.

なお早い未明の刻に、

木戸の鍵を開けることも一度ならず、

春シタミの声もひびかぬ朝まだき、

山あいの小高い頂きに、ただ独り

腰をおろしていたものだ。谷あいの野原は

まったく寂寥につつまれて、森閑と静まりかえっていた。

そのとき私の感知したものの由来をどうして辿り、

その根源をどこに探しもとめたらよいのだろう。

そうした折にしばしば、いと聖なる静穏の気が

私の魂をおおいつつみ、私は肉眼のあることも忘れ、

目のあたりに見える事物は私自身の内に在るもの、

夢か、はたまた、内心にひろがる展望、

のように思われたのだ。

すぐに気づくことの一つは、ここでも、前稿でみたのと同様に、少年の孤独 (*I sat alone*) と自然の寂寥 (*The Vale lay quiet in an utter solitude*) とが美しい照応をみせていることであり、そのことは、こうした孤独・寂寥の照応が、四つのエピソードに限らず、ワーズワスの自然体験全般に通ずる本質的な要素であることをものがたっている。また、「私の内心にひろがる展望」という情景は、これも前稿であげた A・C・ブラッドリーの忘れがたい洞察、すなわち、「ワーズワスにあつては、ある事物を孤独・寂寥 (*lonely*) と呼ぶことは、その事物が無限なるもの (*infinity*) への光り輝く、あるいは厳肅・荘厳な展望 (*a bright or solemn vista*) を開いてくれるということにはかならない」という言葉が、この場合にもあてはまることを想起させるばかりでなく、ブラッドリーの '*vista*' という言葉は、上の一節の "*prospect*" をふまえているのではないかとさえ思われる。

このような自然の事物の内在化体験が、ワーズワスの自註の言葉どおり、必ずしもワーズワスだけの特異なものでなくて、ある程度普遍的な体験であることの、もっとも正眞な詩的証言として、トラハーン (Thomas Traherne) の「わが靈魂」(*My Spirit*) があることは、よく知られている。ワーズワスが生前に知る機会のついになかったトラハーンの形而上詩特有の分析的・思弁的な観照の底には、本質的にワーズワスの体験に通ずる要素も少なくない。たとえば、トラハーンは「私の魂は中心から遠方の事物に働き及ぶのではなくて、事物を見ると、触目した存在物と共に存在して、現にそこにあるのだ」(*It Acts not from a Centre to Its Objects as remote, But present is, when it doth view, Being with the Being it doth note. Il. 18-20*) とつつ、また「その中心に円やかな全域がありながら、ここに閉じこめられてあるのではなく、いたるところに遍ねく在る」(*In its own Centre is a Sphere Not shut up here, but every Where. Il. 16-17*) とつつ、そして「事物が私の眼前にあったとすれば、高貴な『自然』生来の法則のおかげで、わが靈魂の内に在ったのだ」(*An Object, if it were before my Eye, was by Dame Nature's Law, Within my Soul. Il. 37-39*) とつつ、うに視覚の神秘、認識の神秘、存在の神秘、時空の神秘などを分析的、漸層的に語り重ねて、窮極的には「いまや罪ゆえにかげりをみせてはいるが、この世界を創造したもうた偉大な精神の中にわれらが見い出す汚れなき事物に酷示した姿で」(*nigh of Kin To those pure Things we find In his Great Mind Who made the World: tho' now Ecclyps'd by Sin. Il. 114-116*) 万象が観ぜられる観照体験に語りおよんでいる^④。そこには、様相はことなっても、本質的にはワーズワスの「内心にひろがる展望」あるいは「思惟するものすべて、思惟観照の対照たるものすべてを生動させ、万象を貫いてめぐりめぐる霊」という、より直観的、包括的な観照に通ずる要素があろう。が、しかし、ワーズワスのあの「(思惟の中へと) 落ちゆくものら、消えゆくものら」と

いう想念および孤独・寂寥の照応体験はトラハーンの「わが靈魂」にはみられないものであって、後にもふたびふれるように、それはワーズワスの観照体験の大きな特質の一つではなからうか。

ところで、上の『序曲』の一節の「内心にひるがる展望」の場合にも、さきの自註から察知される情況に似通って、少年の魂が「聖なる静穩」(a holy calm) すなわち、自然に臨在する靈の(もたらす)静穩、に包攝されてあるという情況があつて、同時にその情況の中で、眼前触目の事物が少年の内面空間に内在するものとして観じられるという、観照・視点の重なり合いがみとめられる。ここで注意しなければならないのは、静穩がとりつつむのは少年の魂(my soul)であつて、たんなる感覚的な雰囲気にとどまらない、ということである。「聖なる静穩」を「自然に臨在する靈の(もたらす)静穩」と補綴しておいたが、それは、『序曲』第十二巻の冒頭でワーズワス自身が「自然より感動は来り、静穩の情も同じく自然の賜物」(From Nature doth emotion come, and moods Of calmness equally are Nature's gift.)と語っているからである。その一節でワーズワスは「(人間の心に流れこむ)この二重の感化力(this twofold influence)は自然のあらゆる恩恵の中でも、陽光と慈雨ともいふべきもの」といい、さらに、「こうして天才の精神は、それによって眞理を探求し、それによって心目覚め、懂れ、摺みかかり、もがき苦しみ、祈り、切望する力たるあの精氣を自然から受け、また、その眞理をわれしらず受けるにふさわしいものたらしめる、あの幸せな心の静けさも自然から受けるのだ」(Genius... from her receives That energy by which he seeks the truth, Is rous'd, aspires, grasps, struggles, wishes, craves, From her that happy stillness of the mind Which fits him to receive it, when unsought.)と語っていて、かかる静心が、「求めぬときに」(when unsought)われしらず訪れる(恣意を越えた)実相観入の境地の根底たることに説き及んでいる。早朝散策の幼少体験が直ちにそうであるとは、むしろ、いえないが、の

ちにもふれるように、ワーズワスはこうした体験をふくむ幼少体験に詩精神の萌芽を見いだしているのだから、あの一節や先の自註にもある夢（a dream）という言葉にちなんであるなら、それは、キーツのいう想像力としての「アダムの夢」（Adam's dream）、T・S・エリオットがダンテの想像力に關していった「高き夢」（high dream）^⑦に相当するもの、ワーズワスの原初体験といってもよいのではなからうか。

いま、かりに、恣意を超えた実相観入といったが、湖畔散策の一節においても、自然の靈による包攝感、自然の事物の内在感の「由来をどうして辿り、その根源（the origin）をどこに探しもとめたらよいのか」という自問は、その体験の脱我的な性格をものがたっている。また「肉眼のあるのを忘れ……」という観照も、眼はあくまでも本来の働きをなしつつ、しかも恣意的自我の桎梏や影響からはとんど完全に離脱して、内面と外界との澄明な通い路になっていることをものがたっている。その自問に答えて、あの包攝体験、内在体験の「由来・根源」を詩人みずからの言葉でもっとも端的に言うとするれば、たびたびの言及にはなるが、やはり「ティンタン寺院」（Tintern Abbey）のあの古典的な一節、「あるそよぎ、ある靈気」の一節をあげるのが最善であらうか。

And I have felt

A presence that disturbs me with the joy

Of elevated thoughts; a sense sublime

Of something far more deeply interfused,

Whose dwelling is the light of setting suns,

And the round ocean, and the living air,

And the blue sky, and in the mind of man:

A motion and a spirit, that impels

All thinking things, all objects of all thought,

And rolls through all things. (ll. 94-103)

そして私は感じ知るようになったのだ

気高き^げ思いの生む喜びもて私の心を

たちざやがせるある存在を——いと遙かに深く

あまねく滲み透つて在るもの、日ごとの夕日の光にも、

円やかな大海原^{おきなはら}にも、生き生きとそよぐ大気にも、

澄みわたる大空にも、はた、人間の心の内にも

あまねく宿るものの莊嚴な氣配を——

思惟するものすべて、思惟・觀照の対象たるものすべてを

生動させ、万象を貫いてめぐりめぐる

あるそよぎ、ある靈氣^{れいき}を。

ジョン・ジョウンス氏は、キーツの感性との対比という文脈で、この一節の觀照の質^{たち}にふれて、「われわれは、完璧に澄明な窓を通して心を奪う光景を見やる思いがする」(We feel like looking through a perfectly clear window at an absorbing spectacle.)とのべて、その觀照の希有の澄明さと脱我性に注目している。^⑧湖畔散策の場合も、思惟する者たる少年の内に宿ると同時に思惟・觀照の対象たる万象に臨在する靈が、恣意的自我を脱した少年の澄明な眼を通して、文字どおり、生き生きと通いわたっていたといえよう。あるいは、より正統的な人格神の様相をおびることにはなるが、『序曲』とはそれほど隔らない時期(一八〇六年頃)に書かれたと思われる

る『逍遙篇』第四卷の冒頭にちかい一節の言葉でいうならば、「そなた、われらを幼少の雲にておおいつつみ、自らその内に在りて、われらの無垢純一な魂と、この現し世で、しばし、無礙自在な靈交を保たんとするものよ」(Thou, who didst wrap the cloud Of infancy around us, that thyself, Therein, with our simplicity awhile Might'st hold, on earth, communion undisturbed. ll. 83-86) と呼びかけられている靈的存在にこそ、少年の包攝体験・内在体験の由来・根源があったともいえる。また、そのような幼少体験があつてこそ、「ティンタン寺院」にみられるようなワーズワスの独壇場といつてよい、澄明にして広大無辺な自然觀照の眼がつちかわれたのではなからうか。

ともあれ、いまあげた「ティンタン寺院」の一節が指呼するように、また、セリンコートが早くから指摘しているように、湖畔散策における少年の「聖なる静穩」につつまれての自然の事物の内在觀照は、同じ「ティンタン寺院」の、これも周知の、あの「静朗にして至福の心境」(that serene and blessed mood) への言いがたい境地における実相觀入に通ずるもの、というよりは、後年そういう心境へと深化・成熟すべきものの萌芽体験であつたと考えられる。

That blessed mood,

In which the burthen of the mystery,

In which the heavy and weary weight

Of all this unintelligible world,

Is lightened: — that serene and blessed mood,

In which the affections gently lead us on, —

Until, the breath of this corporeal frame
And even the motion of our human blood
Almost suspended, we are laid asleep
In body, and become a living soul:
While with an eye made quiet by the power
Of harmony, and the deep power of joy,
We see into the life of things. (ll. 37-49)

あの至福の心境、――

この不可思議な全世界の重苦しい重み、

あの神秘の重荷がそうともたげられる境地――

あの晴朗にして至福の心境、

情愛が優しくわれらを導きやまず、

ついには、この現し身の肉体の息づかい、さらには、

われら人の身の血のめぐりすらも、ほとんど

宙にとめおかれ、われらの肉体は眠り寝ねて、

われらが生動する魂となりゆくあの境地、――

調和の力と喜びの深き力とによって

静かに和んだ眼もて、われらが

万象の生命に観入する境地――。

湖畔散策の少年が「魂をとりつつむ聖なる静穩」のうちに体験した自然観照は、上にみた「静朗にして至福の心境」における、調和と喜びに「和んだ静かなる眼」、あるいは、旧稿でもふれたあの「詩人の墓碑銘」(A Poet's Epitaph)に言う「黙然とおのが心を観照し、そこに眠る静かなる眼」(a quiet eye That broods and sleeps on his own heart)^⑧による実相観入 (We see into the life of things.) の思想体験へと深化・成熟していったものと思われる。また、『序曲』の少年の眼が、脱我的な霊の澄明な通路になっているのと同様に、上の「静朗・至福の心境」においても、「現し身の肉体の息づかい、さらには人の身の血のめぐりすらもが、ほとんど宙にとめおかれ (almost suspended) われらが生動する魂となりゆくあの境地」といういっそう深化した脱我的な霊体験が、より内省的に観照されていて、あの「静穩・至福の心境」が、たんなる感覚的な雰囲気によるのではなくて、万象を貫き、万象を包攝する超絶的な霊の働きに由来し、依拠しているものがたっている。そういえば、先のエノクについての自註において、ワーズワスが死という觀念を受け容れ難かった所以として、「私の霊の御し難い力強き」(the indomitableness of my spirit)とは言わないで、「私の内にあるあの霊の御し難い力強き」(the indomitableness of the spirit within me)と言っているのは、あの「思惟の中へと落ちゆき、消え去った」(fell away, and vanished into thought)における思惟が、「私の思惟」(my thought)と書かれていないのと同様に、その霊が、やはり、「人間の心の内にも宿り…万象を貫いてめぐる、あるそよぎある霊」、すなわち、恣意的自我を超絶した霊的存在、あの「永遠の思惟たる魂」の一樣態、もしくは一端であることを暗にものがたっているのではなからうか。ちなみに、多少意味合いは異なるが、類似の想念は、あのユーモラスな譚詩「馭者」(The Waggoner)の結びの一節で、ワーズワスをしてあの詩を書かせずにはおかなかった詩霊が「わが心の内に出没し、ときには、十年も深き隠れ処より躍り出る内気な精霊」(a shy spirit in my

heart, That comes and goes—will sometimes leap From hiding-places ten years deep) と呼ばれているところにもみられよう。

(3) ところで、上にみた「静朗・至福の境地」の一節において、現し身の血肉の働きが「ほとんど宙にとめおかれ」(almost suspended) とあるのは、旧稿でみた鳥の巢掠りの少年が「烈風によってほとんど宙にとめられて」(almost...suspended by the blast) というのと相似の想念であって、そのときにもあげた『序曲』第一巻(三六三—三七一)の言葉でいえば、両者はそれぞれに、自然に臨在する「永遠の思惟」(the eternity of thought) たる霊の「より厳しい介入」(severer interventions) による、あるいは、その「こよなく優しい恩寵」(gentlest visitation) による、恣意的自我の一時停止(suspension) を象徴的に表現しようとしているのであるが、この「宙にとめおかれ」という想念は、「ティンタン寺院」の文脈の中では、その直前の「あの神秘の重荷、この不可思議なる全世界の重苦しい重みが、そうっともたげられ」(In which the burthen of the mystery, In which the heavy and weary weight Of all this unintelligible world Is lightened.) という一節にみられる、神秘の重荷、今生の重荷、の重圧の一時停止という壮大にして荘嚴な想念と照応していて、それだけに、「静かなる眼」による実相観入の霊的観照体験が、われわれの恣意をこえた恩寵の「不意の」(when unsought) 訪れ(visitation) であるという暗喩の意味の重みを、いっそう深く感知させずにはおかない。

のみならず、この「神秘の重荷」、「この不可思議な全世界の重苦しい重荷」の想念は、「ティンタン寺院」の枠をこえてワーズワスの詩全体の文脈においてみるとき、たとえば『序曲』第一巻の冒頭ちかくの「自らの本性に背くわが自我の重荷、わがものとも、わがために在りしともいえないあまたのうとましい日々の重苦しい重

ず」(That burthen of my own unnatural self, The heavy weight of many a weary day Not mine, and such as are not made for me. II. 23-25) すなわち、旧稿でみた同じ第一巻の「自らに恥じない心境にあるおりにわがものたるあの静穏な存在」(The calm existence that is mine when I Am worthy of myself. II. 360-361) に背馳する恣意的自我の重荷、あるいは、第四巻の「他のことでは大いに罪を犯している私」(I... else sinning greatly. I. 343) とどう（『リファ王』の「罪を犯したというよりは犯された者」・“I am a man More sinn'd against than sinning” Ⅲ, ii, 56. を逆説的にふまえた）恣意的自我（の重荷）とも照応しているばかりでなく、さらには、「不死の告知の頌歌」の「魂にのしかかる現^ま世の重荷」(her earthly freight)、「慣^なわしの重み」(And custom lie upon thee with weight.) などとも照応していて、それらすべてを内包しつつ深い意味の重音を響かせている。が、そのことは、後に別の文脈でふたたびふれることになるので、ここでは想起するにとどめて、当面の問題にかえることにしよう。

II

(1) 上にみたように、幼少期におけるワーズワスの、エノク同体化的想念、および、それにもなう、自然に臨在する霊による包攝体験と、自然万象の内在化体験、そういう表裏一体の神秘的体験は、ワーズワスの精神の深い底流として生きつづけ、独自の成熟・深化をとげながら、後年のワーズワスの思想体験の形成とその意味づけに、少なからぬ影響を与えていると考えられるし、さらに、そういう意味づけをするワーズワスの念頭には、すでにあげた『ヨハネ伝』（一七章二一）の「あなたが私の中に在られ、私があなたの中に在りますように」、あるいは『ロマ書』（二一章二六）の「すべてのものは神より出で、神を通して、神に向かうがゆえに」などの言葉

に典型的にみられる正統の神の観念が、おそらく無限の広がりをもつ大空のような背景としてあったのではないかと思われてならない。そういう意味からも、また、「ルーシー・グレイ」に察知できるエノケ的モチーフが、たんに一篇のバラッドの主題内にとどまらず、ワーズワス自身の私的な体験の詩題化においても働いていることをみる意味からも、そしてまた、当面の孤独・寂寥のモチーフの展開のうえからも、あのよく知られていながら、捉えがたい意味の含蓄をはらんだ「西におもむいて」(*Stepping Westward*) にふれておこう。

この詩には、情景説明として、周知の前書きがついていて、そこでワーズワスは、スコットランド旅行のある夕べ、妹ドロシーと共に、数週間前に一度泊めてもらった渡し守りの家にふたたび立ち寄る途中、ケタリン湖のほとりで土地の婦人二人連れに出合って、その一人から「おや、西におむかいですね」(*What, you are stepping westward?*)と声をかけられた事情を語っているのであるが、その出合いの場所について、ワーズワスはとくに、「あの寥々たる地方でも、もっとも寂寥につつまれた所であった」(*in one of the loneliest parts of that solitary region*)と言ふ、‘loneliest’・‘solitary’、という二語を重ねて、寥々たる辺境の寂寞の情景を強調している。これは、さきにみた『序曲』第二巻の早朝散策の一節同様に、孤独・寂寥の情景がワーズワスの自然との霊交にほとんど不可欠の要素であることを、再三ながら示唆するものであるが、ちなみにつけ加えると、同じスコットランド旅行中の、あの「高地の乙女」(*To a Highland Girl*)との出合いの場合にも、ワーズワスはその詩の中で、「ありがたいことに、天の恩寵によって、かかる寂寥の地に導かれるとは」(*Thanks to Heaven! that of its grace Hath led me to this lonely place. ll. 62-63*)と述懐している。

前書きを受けた第一聯では、このような「家郷遠き異郷の地で」(*In a strange Land, and far from home*)‘ものなべて陰々とわびしへ」(*Behind, all gloomy to behold. — st. 2*)‘夕闇ふかまる中を’、あてどなくさま

よつていたとすれば (If we...were...the guests of Chance) 'それは「尋ならぬ運命」(a wildish destiny) であつたであらうが、しかし、「われらを導きやまぬ(輝く)西空を行く手にして (With such a sky to lead him on) 'たとえ人家も兩宿りもなくとも、足を止め、進むを恐れる人があらうか」とのべて、われらの今生の旅において、魂の出自・家郷であるあの「永遠の思惟たる霊」の臨在とその「主導の光」(a master light)を忘失するなら、その命運は暗澹たるものであらうことを、予示的、逆説的に暗喩したあと、第二冊で次のように語る。

The dewy ground was dark and cold;

Behind, all gloomy to behold;

And stepping westward seemed to me

A kind of *heavenly* destiny:

I liked the greeting; 'twas a sound

Of something without place or bound;

And seemed to give me spiritual right

To travel through that region bright.

露けき地の面は暗く冷たく、

ふりむけば、ものなべて陰々とわびしかった。

西におもむき歩むのは、いわば、

天の定めと思われた。

かの言葉を私は愛しんだ、そは

無辺、無窮なるものの響き、

あの光り輝く境を徒歩^{かち}ゆく霊の

依るべき証^{あかし}とはなった。

第一聯の「尋^たならぬ運命」(a *wildish* destiny)と対応する「天の定め」(a *heavenly* destiny)の「*heavenly*」が、「*wildish*」同様、イタリック(原詩)で強調されていることとあいまって、「霊の依るべき査証」(spiritual right)として「無辺、無窮なるものの響き」(a sound Of something without place and bound)という詩句は、婦人の言葉が、あの超絶的な臨在者たる霊の響き、すなわち天啓、として受けとめられたことを、ものがたっている。ちなみに、ワーズワスの詩の秀れた評釈をのこした故ダウデン教授はこの詩について、「あの婦人の問いかけは、神託的な言葉であると同時に真情こもる挨拶である」(The woman's question is at once an oracular utterance and a courteous salutation.)と述べているが、^⑧この「神託的」(oracular)ということとは、あの婦人の言葉、そして、この詩の主題のみならず、ワーズワスの詩全般の特質であって、それはワーズワス自身が『序曲』第十二巻で、自らの詩作を回想して、「(人間の内なる心という)あの聖域を勇を鼓して歩みつ、夢想ではなくして、神託的な事物を語ってきたのは、わが誇りといえよう」(It shall be my pride That I have dared to tread this holy ground, Speaking no dream but things oracular. ll. 250-252)と述懐している言葉からもうかがえる。そして、そういう意味でも、この詩の「無辺、無窮なるものの響き」は、あの「蛭採る老人」(*The Old Leech-gatherer*)が、やはり「寥々たる地で」(in this lonely place)「あたかも」「天上からの導き」(a leading from above)のように、「不意に忽然と」(unawares)詩人の眼前に立ち現われたのと類似の意味をもっているように思う。

Now, whether it were by peculiar grace,
A leading from above, a something given,
Yet it befell that, in this lonely place,
When I with these untoward thoughts had striven.
Beside a pool bare to the eye of heaven
I saw a Man before me unawares:
The oldest man he seemed that ever wore grey hairs.

故あつての恩恵か、天上からの導きか、

はた、何かの賜物か、ゆくりなくも

この寥々たる地で、私がかくも

胸ふたぐ思いとあらがついているときに、

日の光にさらされ、さえぎるものなき池のほとりで、

不意に一人の男が目あたりに立ちあらわれた、

白髪の、世にもまれな、老いの極みの老人が。

ここでは、「天上からの」(from above)という言葉が、『ヨハネ伝』(八章二四)の「あなたがたは下からの者であり、私は上からの者である」(You are from below, I am from above.)という想念を暗示しているとともに、「われ知らず・忽然と」という二重の意味を生かした、「不意に」(unawares)という的確な一語が、そういう、ほとんど天から垂下したともいえるべき老人の出現のもつ天啓的な性質を示顯するうえで、重要な役割を果たしている。ちなみに、同じ“unawares”という言葉は、(別の機会にとりあげたいと思うが)『序曲』第五卷

(三八九—四一三)の「少年ありき…」(There was a Boy…)の一節でも、同様に、深い意味をはらんで用いられていることも、ここで想起される。

(2) 上にみたように、「西におもむいて」の第二聯では、婦人の宿す「無辺・無窮なるものの響き」に接して、詩人は、「天の定め」たる「あの光り輝く領域」を旅ゆく「*霊の依るべき証*」を感じ得るのであるが、その「光り輝く領域」(that region bright)とは、(その夕べの旅をふくむ)生涯にわたる今生の旅の行く手をいうばかりでなく、同時に、詩人の霊が今生においてそのときも辿りつつあり、また、今生を超えて辿りゆく無限なる世界を指し示しているものであり、ここでも、ブラッドリーのいう「無限なるものへの光り輝く展望」(a bright or solemn vista into infinity)が詩人の眼前に開かれていることがうかがえるのである。が、そういう無限なる世界への旅の思いが、ワーズワスにとっては、いわば、日常の思いであったことは、この「西におもむいて」に関連して、よく言及されることのある『序曲』第十二巻の「私は街道を愛する…」(I love a public road… I. 145)で始まる一節の、^⑩「日頃、*目路*はるかに見える街道が、これまで辿りみた最果ての地点を越えて、ささぎるものなき急な丘の彼方に消えゆくさまは、永遠への道しるべ、ともあれ、未知にして無窮なるものへの道しるべと思われた」(Its disappearing line, Seen daily afar off, on one bare steep Beyond the limits which my feet had trod Was like a guide into eternity, At least to things unknown and without bound.)という詩行でも語られている。いずれにしても、第二聯にうかがえる、今生における霊の旅と、無限なる世界における霊の旅という観照の二重性、もしくは連続性は、結びの第三聯で、いっそう深く捉えがたい意味の陰影をおびて、展開される。

恣意の空間と摂理の空間（その四）

The voice was soft, and she who spake
Was walking by her native lake :

The salutation had to me

The very sound of courtesy :

Its power was felt; and while my eye

Was fixed upon the glowing Sky,

The echo of the voice enwrought

A human sweetness with the thought

Of travelling through the world that lay

Before me in my endless way.

その声は優しく、かの婦人は

生まれ育った湖のほとりを歩みいた。

あの挨拶の言葉は、私には

思いやりの真心の響きと思えた。

その響きに心うたれて、輝よう西空に

ひたすら見入るまにまに、

かの声はこだまとなりて響きつつ、

果てしなくつづくわが道の

行く手の世界を旅ゆく思いに、

人の心の優しさを滲みわたらせた。

婦人の言葉にこもる真情の力に、詩人は「感動した」(Its power is felt.) と言い、ドロシイの日記にも、それに「心を動かされた」(How affecting it was!) とあるが、その言葉の響きが「果てしなくつづくわが道に行く手の世界を旅ゆく思い」に「人間の心の優しさ」(human sweetness) を滲みわたらせたというとき、その「人間の心の優しさ」は、第二聯の「天の定め」(heavenly destiny) と対応していることはいうまでもない。

「天」と「人」との同じような対応は、ふたたび「高地の乙女」に言及するなら、「美しきものよ、常の日の光のなかで、かくも天上の輝きをおびるものよ、そなたは、この世ならぬ光景なるも、私はそなたを人間の心もて祝福しよう」(O fair Creature! in the light Of common day, so heavenly bright, I bless Thee, Vision as thou art, I bless thee with a human heart. ll. 15-18) という一節にもみられるのであり、その「高地の乙女」があゝの詩の結びで「そなた、これらすべての情景の霊たるものよ」(Thee, the Spirit of them all.) と呼ばれているのと同様に、「西におもむいて」のあの婦人も「無辺・無窮なる」霊の臨在として観照されていることを、この対応は暗示している。のみならず、この「天」と「人」との対応は、「果てしなくつづくわが道に行く手の世界を旅ゆく思い」というのが、あの「光り輝く展望」のもとに自ら見えてくる「無辺・無窮なる」霊の旅路、すなわち、「神より出で、神に向かう」旅路の思いであることを、第一、第二聯にかさねて、ここでも漸層的に暗喩している。

いま霊の旅路といったが、それはワーズワスにとって、(たとえ第二聯の「ふりむけば、ものなべて陰々とわびしかりき」というのがワーズワスには「現し世の重荷」と同義であった今生の「闇」(darkness)、あるいは今生の暮れをも暗喩しているとしても、なお) 必ずしも彼岸の世界だけに限定されるのではなくて、「ひとひとと日が生来・自然(へ)の敬愛に結ばれて」(I could wish my days to be Bound each to each by natural

piety.)、*「自然とともに敬虔な愛の心もて歩む」* (That spirit of religious love in which I walked with Nature) 今生での霊の旅をも包攝する道程であろう。というのは、*「あの婦人は生まれ育った湖のほとりを歩いてゐた」* (She... Was walking by her native lake.) という注釈的な一行がとくに加えられているのはなぜか、その眞意を探りゆくとき、*「不死の告知の頌歌」*のエピグラフともなっているあの「虹」(The Rainbow)の一節の「生来・自然(へ)の敬愛」(natural piety)、『あるいは『序曲』第二巻の「自然とともに歩む敬虔な愛の霊」という想念に、おのずから辿りつくからである。すなわち、婦人の穏和な (The voice was soft.)、礼節、思い遣り (courtesy) の眞情がおのずから発露したのは、婦人が生まれ育ち、そして、(ドロシーによれば、夕べの湖畔散策中であつたことが象徴するように) 敬愛していたであらう、家郷の自然の中においてであつたという事実、第一聯の「家郷遠き辺境」での「尋ならぬ運命」に對比すべき事実、の指摘は、寓意・象徴としては、次のことを暗喩している、すなわち、人間の魂 (soul) がその生来・本然の善美を発露できるのは、魂が、あの『序曲』第一巻冒頭の一節にいう「自らの本性に背くわが自我の重荷」(that burthen of my own unnatural self)を負いつつも、その出自・根源たる(神の)霊の臨在を感知し、そこへの帰一の歩みをたどるとき、すなわち、「神とともに歩み」、「神に向かう」ものたる霊 (spirit) としての存在となるときに、はじめて眞に可能であることを暗喩している、と思われるからである。

あの婦人のただひと言の挨拶を、善美なる眞情の発露としては、あまりにささやかだと思ふことがワーズワスの本意にそぐわないことは、「ティンタン寺院」のあの「神秘の重荷のもたげられる至福の境地」の一節において、「善き人の生涯の最善の部分、名も告げず、覚えてもない、ささやかな慈しみと愛の行為」(that best portion of a good man's life, His little, nameless, unremembered, acts Of kindness and of love. II.

33-35) が、自然の与える喜びの情感につちかわれることの少なくないことを語る一節を想起すれば、理解できようし、この一節が『マタイ伝』(六章三)の「あなたが施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない。これは、あなたの施しが隠されてゐるためである…」という周知の章句の思想をふまえていることは、いうまでもない。

このように、第三聯では、「生来・自然(へ)の敬愛」、あるいは、「自然とともに歩む敬虔な愛の靈^{たましい}」という想念に通ずる思いが暗喩されていて、あの婦人の湖畔での眞情こもる行為の情景は、詩人にとって、今生においても、そしてまた「神これをとりましたいし」後の世^{あき}においても「神とともに歩む靈」の美わしさの象徴であつて、ここにも、ワーズワス特有の観照の二重性、というよりは、むしろ連続性、がみとめられよう。というのは、「in my way」という語句を、十八世紀的な用法のもつ「途上で(の)」「(on the way)」「道ぞいに」(along the road)、「道すがら」(as one proceeds)という意味で用いた「果てしなくつづくわが道の行く手の世界を旅ゆく思ふ」(the thought Of travelling through the world that lay Before me in my endless way)とつう、やや複雑な含みの多い詩句が示唆するように、詩人は、その道を、あくまでも、今生と来世とを貫く一筋の無限の道として思い見ているのであり、その行く手の世界をもまた、今生と来世とを包攝する「無辺・無窮」の世界として観じているからである。

しかも、第一聯では「われら」ではじまったのが、第二聯で「私」となり、第三聯では、「私の果てしなき道」で結ばれていることからうかがえるように、ワーズワスは、「天の定め」(heavenly destiny)である、その無限なる帰一の道をたどる孤独な靈が、今生をふくむあの「無辺・無窮」の世界において、孤独なるがゆえに、互いに希求せずにはおれない靈交(communion)の可能性をも、同時に望み見ているのであり、それゆえにこ

そ、婦人の思い遣りにあらわれた「人の心の優しさ」(human sweetness) が、こよなく愛しい靈交の希望の証しとしても、感知されたのではなからうか。なお、「果てしなくつづくわが道の行く手の世界を旅ゆく思い」という想念の内包については、この「西におもむいて」の影響をとどめているA・E・ハウスマンの詩「遠いかなたから、夕べ、はた朝の方から」(From far, from eve and morning.—A Shopshire Lad, XXXII) が側光を投じてくれるが、それについては、末尾の補遺でのべることにする。

III

(1) ルーシー・グレイの「歩み」(She trips along) という「西におもむいて」の「歩み」(stepping, travelling) といひ、詩人の「自然と共なる歩み」(I walked with Nature) といひ、あるいは、ワーズワスの詩にあらわれる数多くの孤独者たちの象徴ともいえる「蛭採る老人」の「孤独な歩み」(to see him pace about... continually... alone) といひ、それらはすべて、自然に臨在する超絶的な靈の中で人間の孤独な靈がたどる帰一の動き、すなわち、「神を通り、神に向かう」動きであるが、この「神の中での生動」(In him we live and move...) という想念は、当面の『序曲』第一巻の四つのエピソードの第四のモチーフ、すなわち、「動き、そよぎ」(move, motion) のモチーフを示唆してくれるのである。

すでにみた三つのモチーフの場合と重なることをいとわずに引用すれば、山鳴捕りのエピソードでは、少年が「あの低い息づかい、定かならぬもののそよぐ音、ひそやかな足音が追いつ迫るのを…聞いた」(Low breathings coming after me, and sounds Of undistinguishable motion, steps Almost as silent as the turf... ll. 330-332) という、その「低い息づかい」(low breathings)、「定かならぬもののそよぐ音」(undistinguishable motion)。

「足音」(steps)の「迫り来^る」(coming after)動静が、そうであり、鳥の巢掠りの場合は、「亮々と唸る乾いた風が、いとも不思議な言葉を発しつつ、耳から耳へと吹きぬけ、…雲々は何という動きで疾駆したとか」(With what strange utterance did the loud dry wind *Blow through* my ears!... and *with what motion mov'd* the clouds... ll. 348-350)という、その亮々たる「風の息吹き」(blow through)、雲々の「動き」(motion, mov'd)が、そうである。また、ボート盗みのエピソードでは、あの「巨大な断崖が、星空と私との間に立ちはだかり、生けるものごとく刻々と歩調を見はからって動きつづ、なおさらに追い迫ってきた」(The huge Cliff *Rose up* between me and the stars, and still, *With measur'd motion*, like a living thing, *Strode after me*... ll. 409-412)における「立ちはだかり」(rose up between)、歩調をみはからって動きつづ」(with measur'd motion)、大股に追い迫る」(strode after me)動きがそうである。さらにまた、氷滑りの場合には、「急停止したのちも、いぜんとして、寥々たる断崖が、あたかも大地の日々の運行を目のあたりに、示現するかのように、身のまわりを廻りつづけた」(Stopp'd short, yet still the solitary Cliffs *Wheel'd by me*, even as if the earth had *roll'd With visible motion* her diurnal round... ll. 484-486)における「目のあたりに見える動きづ」(roll'd with visible motion)、廻りつづけた」(still wheel'd by me)がそうである。

(2) このような畏怖すべき自然の「息吹き」(breathing)や「そよぎ・動き」(move, motion)は、日常的、平俗的な意味でなら、単に少年の意識の投影、あるいは、ボート盗みや氷滑りのエピソードにおけるように、「あたかも」(as if)、「まるで」(like)という直喩、限定辞を伴う場合には、物理的な錯覚現象と見るのが普通であろう。が、しかし、いうまでもなく、ワーズワスの自然観照の文脈においては、事情はそうのように簡単で

も、一面的でもない。というのは、ポルト盗みの結びの一節で、詩人が、「この出来事を見たあと、幾日ものあいだ、私の脳裏は未知なる有り様の存在をおぼろげに、定かならず感じてわななきふるえ」(After I had seen That spectacle, for many days, my brain Work'd with a dim and undetermin'd sense Of unknown modes of being. Il. 417-420)、「生身の人間と同じ在り様で生きて在るとはいえないようないとも強大な形象が、昼間はゆっくりと私の心の中を動いてゆき、夜は夜で私の夢を悩ますのだった」(But huge and mighty Forms that do not live Like living men mov'd slowly through the mind By day and were the trouble of my dreams. Il. 425-427)と語っているように、少年は子供ながらに、あの自然の「そよぎ・動き」(motion)の背後・根源に、また、その「そよぎ」が少年の耳目を通して内心に達し、そこで少年の犯しの意識と呼応、共鳴して惹き起こす畏怖の情動 (emotions) の背後・根源に、把握しがたい在り様の在在物の動きがあるのを、おぼろげに感知 (know and feel) しているからである。ここでは、また、「強大な形象せるものら」(huge and mighty Forms)と複数で感知されている存在物は、やがては、幾度も言及するあの「形象ある事物に息吹きと永遠無窮の生動を与えるもの、宇宙の英知ある霊、永遠の思惟たる魂」(Wisdom and Spirit of the universe ! Thou Soul that art the eternity of thought, That gives forms and images a breath And everlasting motion.) と呼ばれ、また「万象を貫いてめぐりめぐるあるそよぎ、ある霊気」(a motion and a spirit that... rolls through all things) として感知されることになるはずのものにはかならない。

さらにまた、上にみた四つのエピソードの「そよぎ・動き」の詩節、とりわけ、氷滑りの少年の内面空間に「動きゆくものら」という一節には、『失樂園』(Paradise Lost) 第十一巻の、原罪直後のアダムの内心を神が透察して語る一節―「アダムはいまや悲しみ、悔い、罪を歎いて祈っている。それは、彼の心のうちに働くわが

促し。それが止んだ後の彼の心も私にはわかつてゐる。独りに棄ておかれたならば、いかに定めなく、空無であるのかを」(He sorrows now, repents, and prays contrite, *My motions in him; longer than they move, His heart I know, how variable and vain Self-left. ll. 90-93*) — の「とく」に「神意の促し」(my motions in him) とその「動き」(they move) を、そして人間の「孤独」(self-left) という、二つの重要な想念の余韻がみとめられることも、周知のことではあろうが、想起されよう。

しかし、それをよりワーズワスのな言い方で補足するというとすれば、ボート盗みの場合のように、断崖が迫り来るのが物理的錯覚の結果であるとしても、そのような情況で、そのような錯覚現象がおこるように自然の物理的秩序が成り立っていること、しかも、その錯覚が耳目を通して少年の内心にまで達し、内なる犯しの意識のとのきと照応・共鳴するように人間性(human nature)が成り立っているということ自体に、「宇宙の英知ある霊、永遠の思惟たる魂」の業(ministry, workmanship)があらわれている、というべきであらうか。あるいは、ルーシ詩篇の一つ「三年に成りぬ、日の光、雨の恵みを受けて」(*Three years she grew in sun and shower*)の一節の言葉でいうなら、「自然の「動静」(motions)と人間性の「情動」(emotions)との根源には「暗黙の共感」(silent sympathy)が秩序づけられているといえよう。

"The floating clouds their state shall lend
To her; for her the willow bend;
Nor shall she fail to see
Even in the motions of the Storm
Grace that shall mould the Maiden's form

By silent sympathy.

"The stars of midnight shall be dear
To her ; and she shall lean her ear
In many a secret place
Where rivulets dance their wayward round,
And beauty born of murmuring sound
Shall pass into her face."

漂^うよう雲は氣^き高き風姿を彼女に授け、
柳は身をかがめてお手本となろう。

吹きすさぶ嵐の鳴動のさなかにすらも、
無言^{むごん}の共感によりて

乙女の姿態を形づくる優美の恵みのやどるのを、
彼女は見逃^{みどろ}がすことはあるまい。

深き夜の星々は彼女の愛^{いと}しむもの、
おちこちのひそやかな野辺に
思うさ流れる小川のはとりで、
彼女はそうと耳を傾けると、
ささやく川音の美しさは
彼女の顔^{かほ}に移りゆくのだ。

この詩の最初の「日の光、雨の恵みを受けて」(in sun and shower)は、すでにみた『序曲』第十二巻冒頭の「自然より来る感動……と静穏」(「陽光と慈雨」(sun and shower)ともいふべき「二重の感化」(twofold influence)に通ずる想念である。そして、その「陽光と慈雨」がすでに象徴しているように、高雅、謙讓、鳴動、静謐など、自然の一見矛盾・対立するあらゆる動靜 (motions, calmness) が「乙女の姿態・形相」(the Maiden's form) を形づくる「優美・恩寵」(Grace) である、というこの詩のモチーフの一つは、前々稿でもみた『序曲』第一巻の——「不協和音を和合させる目に見えぬひそかなる業」(a dark Invisible workmanship that reconciles Discordant elements. ll. 352-354) によって、「人間の精神が、音楽の調和あるそよぎさながらに、形づくられる」(The mind of Man is framed even like the breath And harmony of music. ll. 351-352)——という一節の思想体験の美しい変奏である。が、そのモチーフの要素々々を占める「そよぎ・促し」(motions)・「姿態・形相」(form)・「優美・恩寵」(grace) などの言葉は、すべて、日常、平俗的な意味と同時に、この詩の第六聯にみえる「かかる思いを彼女に与えよう」(Such thoughts to Lucy I will give.) という「自然(に臨在する霊)の思惟」に照応する形而上的な意味をその内奥に重層的に含蓄していて、それがこの詩全体の意味の内包に意想外の深みと広がりを与えている。というのは、ここでくわしく立ち入る用意はないが、ワーズワスが好んで用いた「form」という言葉には、正統への接近が深まった時期の作であるが、「ダドン河ソネット集」(The River Duddon) の結びの一篇「後の思ひ」(After-thought) の——「ダドンの流れよ、かえり見ると、私には見えてくる、かつて在り、今も在り、とこしえに在りつづけるものが。いままなおそなたは流れはた、永遠に流れつづけよう。形相はとどまりて在り、働きは絶えることはない。……われら、ひそやかな奥つきに向かいつつ、愛と、希望と、信仰の恩寵とによりて、われら人間は自らに思い知る以上に大いなるものた

るを感知するならば、心足れり」といふ」（For, backward, Duddon ! as I cast my eyes, I see what was, and is, and will abide; Still glides the Stream, and shall for ever glide ; The Form remains, the Function never dies... Enough, if... as toward the silent tomb we go, Through love, through hope, and faith's transcendent dower, We feel that we are greater than we know.）——といふ好例からもうかがえるように、プラトンやアリストテレスによって考究された「形相」の意味が、（厳密にプラトンのともアリストテレス的ともいえないように思えるが）、しばしば加味されているのであり、そのことはこのルーシー詩篇についてもいえるからである。

この詩では、周知のように、結びに近い一聯で、自然が「この幸せな谷あいの野辺にわれら共に暮らす間に、かかる思いを彼女に授けん」（Such thoughts to Lucy I will give, While she and I together live Here in this happy dell.）というところ、ルーシーは自然の思ふ（such thoughts）にある「乙女の形相」（the Maiden's form）を体現する娘に育ちゆく、と思う間もなく、たちまちに身まかつて、自然に帰し、あとには、「かの静穏な野辺」（This heath, this calm, and quiet scene.）と、「二度と帰らぬルーシーの在りし日の思ひ出」（The memory of what has been, And never more will be.）が残るだけとなり、第一聯における自然の言葉「すなわち、この子を私は引きとらん、この娘こそわがもの、わが思ひの淑女に育てん」（This Child I to myself will take; She shall be mine, and I will make A Lady of my own.）という含みのある予言が、意外な、衝撃的な在り方で実現することになるのであるが（The work was done — How soon my Lucy's race was run !）、このような想念の流れをたどってみると、自然の動静（motions and calmness）と人間の情動（emotions）との共感による人間性（human nature）の神秘的な形成という主要なモチーフとともに、そ

れと緬い交ぜになつて、ここにも「エノク神とともに歩みしが、神これをとりましたまいければ、おらずなりき」というエノクの婦一のモチーフが、独特な深化と変容をへて、滲透していることがうかがえよう。

そればかりではなく、第一聯で自然みずからが「かくばかり愛しき花は今生に蒔かれしことなかりき」(A lovelier flower On earth was never sown.)というほどにかけがえなく愛しいルーシーの死は、「ルーシーの生涯のかくも疾くおわらんとは」(How soon my Lucy's race was run)という歎きが語るように、人間にとつては取り返しのない、悲劇的な喪失ではあつても、神がエノクをとり、エリアをとりたもうた(『列王記』下二章)と同じように、自然に臨在する「永遠の思惟たる霊」は、その思いにある「乙女の形相」(the Maiden's form)にしたがつて、いま一人の、さらにいま一人の、いずれもまたとなきルーシーを、つぎつぎと育て上げては、その懷に引きとる業をつづけてゆくであらう、という暗黙のモチーフがこの詩の主題の深層から、おぼろげにはあるが、おのずから立ちあらわれてくるのである。ちなみに、「乙女の姿態・形相」(the Maiden's form)という言葉が、「彼女(ルーシー)の乙女としての姿態・形相」(her Maiden's form)でなく、普遍的な「the Maiden's form」であることも、ちぎの自註の「私の中の霊」(the spirit within me)同様に、注目すべきことであらう。

IV

(1) 上にみたように、自然万象の物理的な秩序・生動の内奥にも、また、人間性の内的秩序・生動の内奥にも、あの「永遠の思惟たる霊」が共通の根源、いわば原動者として存在しているという思想体験は、いうまでもなくワーズワスの詩の最も重要、顕著な特質の一つであつて、同じルーシー詩篇の、あまりによく知られた「睡みが

わが魂を」(A *Slumber did my spirit seal*) の一節——「彼女はいまやそよとの動きも、力もない。聞くことも見ることもなく、大地の日々と日々と運行に帰一してめぐりめぐっている、^{いちは}敵や石や木々とともに」(No motion has she now, no force; She neither hears nor sees; Rolled round in earth's diurnal course, With rocks, and stones, and trees.)——も、一見、静止、死滅していると思える事物・存在が、より大いなる秩序・生動に包攝されてあることを言わんとする、最高度に凝縮された表現であるといえよう。がしかし、ここでは、この点についていますこし別の面から見ておくことにしよう。『序曲』第二巻で、幼な子が母親の愛情に見守られ、教えられつつ、自然との物心両面の接触、交流を学びながら、魂、とりわけ詩魂、の成長をとげることをのべた周知の一節では、ワーズワスは、人間の体内にも働く重力にふれて、次のように語っている。

No outcast he, bewild'rd and depress'd;

Along his infant veins are interfus'd

The gravitation and the filial bond

Of nature, that connect him with the world.

Emphatically such a Being lives,

An inmate of this *active* universe;

From nature largely he receives; nor so

Is satisfied, but largely gives again,

For feeling has to him imparted strength,

And powerful in all sentiments of grief,

Of exultation, fear, and joy, his mind,

Even as an agent of the one great Mind,
Creates, creator and receiver both,
Working but in alliance with the works
Which it beholds. — Such, verily, is the first
Poetic spirit of our human life. (Il. 261-276)

幼な子は、途方に暮れて氣落ちした^{たふ}逐らわれの身ではない。

その幼き血管のすみずみにまで、大自然の重力と

親子の絆が滲みわたっていて、

この世界に幼な子をつなぎとめているのだ。

かかる存在者たる幼な子は力づよく生きてゆく、

この生動する宇宙の居留者の一人として。

大自然から幼な子は存分に受けとりつつも、

それで心足りるのではなくて、存分に返し与えるのだ。

なぜなら、情感が幼な子に力を分かち与え、

幼な子の精神は、悲しみ、有頂天、畏れ、喜び、

そうしたあらゆる情感を力強く感じつつ、まさしく

唯一の偉大なる精神の代行者として創造するのだから、

創造者であり、はた同時に、受容者であり、

それが目にとめる自然の業^{わざ}と力を合わせてこそ

はじめてその業を成しとげることができる。——まことに、

これこそわれらの人生における初めての詩精神のあらわれなのだ。

ここには、さきに「三年みとせとなりぬ」とあわせてみた『序曲』第一巻の「不協和音を和合させる目に見えないひそかなる業わざ」と前後する一節の「あらゆる畏怖、あらゆる悲嘆、悔恨、困惑、懶惰らんだ、これらすべての思惟、情感が…自らに恥じない心境にあるおりにわがものたるあの静穏な存在をつくりあげた」(That all The terrors, all the early miseries, Regrets, vexations, lassitudes, that all The thoughts and feelings... have made up The calm existence that is mine when I Am worthy of myself. ll. 355-361) という想念の再現がみとめられるばかりでなく、よく指摘されるように、「ティンタン寺院」の「われらの耳目が半ば創造し、半ば感知するもの」(both what they half create, and what perceive.) という想念の変奏もききとれるのである。が、そのことは、(旧稿でもその一端にふれたので)^⑧ おくとして、ここでふれておきたいのは、重力(gravitation)と親子の絆(the filial bond)を包含する想念、あるいは思想体験についてである。

前々稿でみた、鳥の巣掠りの少年を危うく断崖に宙吊りにしたあの不気味な(malign)重力は、ここでは、その好ましい(benign)相において、すなわち、人間の心身を安泰たらしめる自然の力として、観照されている。がしかし、鳥の巣掠りのエピソードからもうかがえるように、ワーズワスにとって重力は、人間の恣意的自我からみて好悪いずれの相をみせるにしても、人間をふくめて万象が、たんに物理的存在としてのみならず、「いと遙かに深く滲みわたる霊」(something far more deeply interfused)に貫かれた存在として、従うほかない摂理の象徴でもあったことは、いうまでもなく、そういう意味から、「神秘の重荷」(the burthen of the mystery)などワーズワスが好んで用いる‘burthen’という言葉には、『イザヤ書』(二三章一)の「イザヤに示

されたバビロンについての神託」(the burden of Babylon, which Isaiah... did see.)におけるような「定めを告げる神託」という古来の意味の余韻が、多少とも含まれているのではないか、ということは前々稿でもふれておいた。

また、上の一節で、その「重力」と並んであらわれる「親子の絆」(the filial bond)も「一見、自然との(重力をふくむ)物質的な絆、たとえば「土より生まれ、土に帰るもの」(For dust thou art, and unto dust shalt thou return. *Genesis*, 3 : 19)としての人間の一面をあらわしているかにみえるが、後続の「まさに、唯一の偉大なる精神の代行者として、創造する…」(Even as an *agent* of the one great Mind, Creates...)という詩行とあわせ考えるとき、この「親子の絆」は、より内面的、霊的な絆を含意していて、あえていうなら、「アバ、父よ」(Abba, Father)という幼児語で神に呼びかけることを初めて身をもって示したといわれるイエスの、『マルコ伝』(一四章三六)における、「アバ、父よ、あなたは全能です。この杯を私から取りのけください。わが思いのままではなく、御意のままに」(Abba, Father, all things are possible to thee; remove this cup from me; yet not what I will, but what thou wilt.)をはじめとする、福音書を通じてのたびかさなる「父よ」という呼びかけはもとより、『ガラテア書』(四章六)あるいは『ロマ書』(八章一五)におけるパウロの、「このように、あなたがたは子であるのだから、神は私たちの心の中に、『父よ』と叫ぶ御子の霊を送られたのである。したがって、あなたがたはもはや僕ではない、子である」(And because you are sons, God has sent the Spirit of his Son into our hearts, crying, "Abba, Father!") So through God you are no longer a slave but a son. *Galatians*, 4 : 6-7) という言葉などにみられる正統の思想をふまえているのではないかと思われる。

そして、そのように思える依り処の一つには、「不死の告知の頌歌」の次の一節が想起される、すなわち、たんに物質的、物理的存在としての「大地」(Earth)は「その膝もとを喜びで充たし」(Earth fills her lap with pleasures of her own.)⁷「母の心の片鱗らしきものすらみせる」(even with something of a Mother's mind)が、究極的には、「この素朴な乳母は、その寄留者たる育て子をして、それが感知していた栄光と、その家郷たる壮麗な館を忘れさせんと力をつくす」(The homely Nurse doth all she can To make her Foster-child, her Innate Man, Forget the glories he hath known, And that imperial palace whence he came. II. 81-84)のであって、大地の与えるたんなる感覚的・物質的な喜びが、いわば、パスカルのいう「気晴し」(divertissement)にすぎないことを示唆するあの一節である。

また、二つには、セリンコートの註釈の教えるように、ワーズワスが読み知っていたことがわかっている『スペクティーター』紙の重力に関するアディスン筆の次の一文も想起される、すなわち——「物質のあらゆる粒子はそれに透過している全能者によって現に生動せしめられている。天も地も、恒星も遊星も、その内部に宿るこの偉大な原動力によって動き、運行している」(Every particle of matter is actuated by this Almighty Being which passes through it. The heavens and the earth, the stars and planets, move and gravitate by virtue of this great principle within them.)⁸ここにみえる万象に「滲み透る」(pass through)「全能者」(the Almighty Being)という想念は、いうまでもなく「ティンタン寺院」の「万象を貫いてめぐりめぐる……あるそよぎ、ある靈気」(a motion and a spirit that... rolls through all things)や、「いと遙かに滲みわたりてあるもの」(something far more deeply interfused)に通ずる想念であり、そして、この一文にみられるような重力観がワーズワスの自然観照の背景にあったことを思えば、ワーズワスにおいて、重力が自然に臨

在する神の霊の属性のあらわれとして、また、神と人間との父子の絆と一体をなすものとして観照されている所
以が、よりよくうかがい知れよう。

(2) ところで、重力が神と人間との父子の絆の一端であるといっても、ワーズワスにあっては、さきにもふれた
ように、それは人間の恣意的自我にとって好悪両面をそなえたものとして観照されていて、このことがワーズワ
スの自然観照に深い象徴的な陰影を与えている。というのは、鳥の巣掠りのような、恣意にまかせた冒険の場合
に、重力が少年の恣意にとって畏怖にみちた様相をみせるのは当然であろうが、ワーズワスの日常の意識におい
ても、重力は象徴的な意味をおびて、「ティンタン寺院」のあの「神秘の重荷」(the burthen of the mystery)・
「この不可思議な全世界の重苦しい重み」(the heavy and weary weight Of all this unintelligible world)・ま
た、『序曲』第一巻の「自らの本性に背くわが自我の重荷」(That burthen of my own unnatural self)・「わ
がものとも、わがためにありしともいえないあまたのうとましい日々の重苦しい重み」(The heavy weight of
many a weary day Not mine, and such as are not made for me)として、重く厭わしい重圧感、倦怠感
とともに、のしかかっていたと思われるのである。そして、これらの言葉の意味の衝撃が想像以上に大きいもの
であったことは、『序曲』を知る機会をもつことなく逝く運命にあった若きキーツの心に、(その書簡からも読
みとれるように)「ティンタン寺院」のあの「神秘の重荷、この不可思議な全世界の重苦しい重荷」という想念
が、「独り黙々とさまよいやまぬ」あの「蛭採る老人」の姿とともに、終始、憑きまとうてはなれなかったこと
からも、うかがえよう。^⑩

さらにまた、「この不可思議な全世界の重苦しい重荷」の一端は、すでにふれたように、『序曲』の「自らの本

性に背くわが自我の重荷」のみならず、「不死の告知の頌歌」において、幼な子の生来の靈性を閉塞させる「現世の重荷」(her earthly freight)、「慣わしの重荷」(And custom lie.. with a weight) といつても感知されている。その一節では、象徴的な意味での重力が靈性との相対性のもとに観照されているといえる。

Thou best Philosopher, who yet doth keep

Thy heritage, thou Eye among the blind,

That, deaf and silent, read'st the eternal deep,

Haunted for ever by the eternal mind, —

Mighty Prophet! Seer blest!

On whom those truths do rest,

Which we are toiling all our lives to find,

In darkness lost, the darkness of the grave;

Thou, over whom thy Immortality

Broods like the Day, a Master o'er a Slave,

A Presence which is not to be put by;

Thou little Child, yet glorious in the might

Of heaven-born freedom on thy being's height,

Why with such earnest pains dost thou provoke

The years to bring the inevitable yoke,

Thus blindly with thy blessedness at strife?

Full soon thy Soul shall have her earthly freight,

And custom lie upon thee with a weight,
Heavy as frost, and deep almost as life !

そなた、こよなき哲人よ、受けつぎし天恵をいまだ保ちつつ、

盲^{めくら}たるものらのさなかにありて眼^{まなこ}さやかなものよ。

久遠^{くゑん}の霊^{たま}の常^{とわ}にゆきかよう永遠^{えいゑん}の海の深みを、

耳^{みみ}こもり黙然^{もくねん}と、読みとるものよ。

力づよい予言者よ、恵まれし予見者よ、

われらが、闇のさなか、墳墓^{ふんぼ}の闇のさなかに迷いつつ、

生涯^{いまた}を勞^{いた}いて見いださんとする

もろもろの眞理^{しんり}は、そなたに臨^まみて在る。

不滅^{ふめつ}の靈性^{れいせい}は、僕^{しもべ}を案^{あん}する主人^{あるじ}さながら、

払いのけようもなき臨在^{りんざい}として、

日の光のようにそなたの上に光被^{くは}している。

幼きものよ、いまだ天性^{てんせい}の自由^{じゆう}の力に輝きつつ、

その存在^{そんざい}の高みにとどまりてあるものよ。

何ゆえに、やみくもにもその至福^{しふく}とあらがい、

かくもいちずに骨折^{こっし}りて、歳月^{としづき}に拍車^{ぱくしゃ}し、

避けがたい軛^{くびき}を早々^{ささ}にもたらさんとするのか。

もうはやに、そなたの魂^{たま}は現^{あら}し世^よの重荷^{おもなかり}を負い、

慣^なわしは、霜^{しも}のごとく重苦^{おもがら}しく、生命^{いのち}のごとく深き

恣意^しの空間^{くうかん}と摂理^{せつり}の空間^{くうかん}（その四）

重みもて、そなたの上にのしかかるものを。

そこで、「現し世の重荷」(earthly freight)とその一端といえる「慣わしの重荷」(custom... with a weight)が「霜のように重く」(heavy as frost)というのは、地表の霜だけでなく、ある程度は地中にも及ぶ水分の凍結のもたらす閉塞感、重圧感をも含意しているのであろうか。また、「ほとんど生命のように深く」(deep almost as life)というのは、この一節の始めにある「永遠の海の深み」(the eternal deep)、すなわち、同じ「頌歌」の後続の一節の「われらを今生に生み出したあの永遠不滅の海」(that immortal sea Which brought us hither)という、靈性に貫かれた生命の出自・根源の深さにほとんど匹敵すると思えるほどに、世俗や慣わしの重みが深甚であることを言わんとしているのであろうが、このような想念に接すると、『序曲』第一巻の、あの「自らの本性に背くわが自我の重荷、わがものとも、わがために在りしともいえないあまたのうとましい日々」の重荷、あるいは、あのソネット「世俗のことあまりにおおし」(The world is too much with us)などにおけるワーズワスの歎きを、ここにも聞く思いがするのである。ちなみに、「久遠の靈の常にゆきかよう永遠の海の深み」(the eternal deep, Haunted for ever by the eternal mind)という想念は、『ユリント前書』二章一〇の「聖靈はすべてのものを、神の深みまでもさがし究めるのだから」(For the Spirit searches everything, even the depths of God.)という一節をふまえているのではなからうか。

いずれにしても、この「現し世の重荷」、「慣わしの重み」は、「自らの本性に背く自我の重荷」同様、「この不可思議な全世界の重苦しい重荷」の示現する一面であり、その重みは、今生における人間の「避けがたい軛」(the inevitable yoke)として、「存在の高み」(thy being's height)にある幼な子を世俗、平俗の次元に引き

ずりおろす重みである、と同時に、それは「人間が迷いこむ闇、墳墓の闇」(in darkness lost, the darkness of the grave)でもあることが、前後の文脈によつて暗喩されている。のみならず、この「避けがたい軛」もまた、さかのぼって、「僕を案じてかがみこむ主人さながら、日の光のように幼な子を光被する不滅の靈性」(Thy Immortality Broods like the Day, a Master o'er a Slave.)という、いささか奇異と評されることのある想念にあらわれる「僕、もしくは奴隸」(a slave)たる幼な子の受くべき軛でもあることを暗喩している。このようにみると、上の一節では、主たる靈性の光と高み、僕たる人間の世俗の闇と重みと低み、という多層な想念が、互いに幾重にも重なり合つて、重層的な意味の統一をつくりあげていることがうかがえる。

いま、奇異と評されることがあるといったが、そう評した筆頭はいうまでもなくコウルリッジで、コウルリッジは周知のように『文学自伝』(Biographia Literaria)二二章で、幼児を「哲人、予言者」と呼ぶのは知的大言壮語 (mental bombast) であると評し、また「主人が僕のうえに」‘brood’し、「日(の光)」(the Day)が‘brood’するとはいかなる意味か、と自問している。^⑧ なおまた、コウルリッジは「久遠の靈の常にゆきかよう」(Haunted for ever by the eternal mind)のは、前行の「永遠の海の深み」(the eternal deep)ではなくて、「そなた、眼たる者」(thou Eye) 幼な子と解して、それにも自問を発しているが、これはさきにのべたように『コリント前書』二章一〇をふまえて、「久遠の靈のゆきかよう永遠の海の深みを読むとる眼」と解する方が、すでにみた「おのが心を観想しそこに眠る静かなる眼」(a quiet eye That broods and sleeps on his own heart)にも通じ合つて、よりよいのではなからうか。あるいは、これは結局は同義または両義のことであるうか。ともあれこれらの評は、むしろ、もっともではある。が、ここです考えられることの一つは、「日の光」(the Day)‘主人」(a Master)‘私」のけようもない「臨在」(a Presence which is not to be put

by) '「不滅の靈性」(thy Immortality) という同一物を指す一連の想念の中の 'the Day' をかりに 'day-light' と言いかえてみると、この 'light' は 'master' と結びついて 'master light' となりうるが、その「主たる光」はいうまでもなくこの「頌歌」の次節の「あの原初的情感、あのおぼろげな回想、たとえそれがいかなるものであれ、われらの生涯の日を照らす光の泉、われらの觀照を司る主たる光」(those first affections, Those shadowy recollections, Which, be they what they may, Are yet the fountain light of all our day, Are yet a master light of all our seeing. ll. 149-153) にあける「われらの生涯の日」(all our day) を照らす、
「われらの觀照を司る主たる光」(a master light of all our seeing) という想念に通じてゆくものにほかならないことがわかる。ちなみに、「僕を案する主人さながら」^⑧、「払いのけようもなき臨在」として、「日の光のようにおおいかぶさる (brood over) 不滅の靈性」というときのワーズワスの念頭に、中世の日時計によく刻まれていたといわれる、「光は神の影である」(Lux umbra Dei.) という箴言^⑨、もしくはそれに通ずる思いがあったのではなからうか。ともあれ、この「われらの觀照」(all our seeing) はまた、さかのぼって、「力づき予言者、至福の予見者」(Mighty Prophet, Seer blest) の 'seer' に通ずるものであり、われらが生涯を勞して探究する眞理の原形が、思想の言語にはいまだ聾啞者 (deaf and silent) たる幼児の魂にすでに直観されてあるという想念は、上にみたようなモチーフの提示・再現・展開という流れの中で受けとめるときには、必ずしも誇張表現とはいえないであろう。

- (3) さらに考えるべきいま一つことは、「払いのけようもなき臨在」(A Presence which is not to be put by) という言葉が示唆するように、内面的・物理的の両義において「僕^{しも}（または奴隸）を案じて（かがみこむ）

主人」という想念は、旧・新約を通じてみられる重要な思想の一つ、すなわち「主たる神」(Lord, Master)に帰順すべき「僕・奴隸たる人間」(servant, slave)という想念をふまえているというものである。その典拠として、「苦難の僕しもべの歌」とも呼ばれる『イザヤ書』五三章をはじめ、『マタイ伝』(一〇章二四)、『マルコ伝』(二〇章四二―四五)、『ヨハネ伝』(一三章三一―二〇、一五章二〇)、『エペソ書』(六章五)など多くの章節をあげることができるが、ここでは『ヨハネ伝』(一三章三一―二〇)の最後の晩餐の夜で、イエス自らが「神より出でて、神に帰らんとするもの」(that he had come from God, and was going to God)であることを思い、自らが父なる神の僕しもべであるように、弟子たちもイエスの僕しもべであり、遣わされた僕しもべを受け入れる者は、遣わした主を受け入れる者であることを寓意的に語る言葉、すなわち、「よくよくあなたがたに言っておく、僕しもべ(または奴隸)はその主人にまなるものではなく、遣わされた者は遣わした者にまなる者ではない」(Truly, truly, I say to you, a servant (or a slave) is not greater than his master; nor is he who is sent greater than he who sent.) という一節をまず想起し、さらに、内容的にそれにつながる意味をもつ『エペソ書』(六章五)におけるパウロの言葉、すなわち、「僕しもべ(または奴隸)たる者よ、キリストに従うように、恐れおののきつつ、真心をこめて、この世の主人に従うがよい、へつらうものとして目先だけの勤めをするのではなく、キリストの僕しもべとして、心から神の御旨を行なうがよい」(Slaves, be obedient to those who are your earthly masters, with fear and trembling, in singleness of heart, as to Christ; not in the way of eyeservice, as men-pleasers, but as servants (or slaves) of Christ, doing the Will of God from the heart.) という一節を想起しておこう。

これらの章節をここであげるのは、福音書を通じてイエスの思いの中では、自らが、そしてひいては人間が、

父なる神の子であると同時に、主なる神の僕であるという想念が、表裏一体をなしているということ、そして当然のことながら、パウロの思いの中でも、さきにみた『ガラテア書』（四章六）の「神は私たちの心の中に『父よ』と叫ぶ御子の霊を送られたのだから、あなたがたはもはや僕ではなく、子である」という一節と、いま上にあげた『エペソ書』（六章五）とが典型的に示すように、神の子たる人間と、主の僕たる人間という、一見対立する想念が、同様に表裏一体に重なり合っていることを想起しておきたいからにはかならない。そして、このように想起してみると、ワーズワスにおいても、さきにみたように、重力が「唯一の大いなる精神の代行者」(an agent of the one great Mind) たる人間存在の「父子の絆」(the filial bond) の一端であると観ずる想念と、その同じ重力が、「不滅の霊性」(thy Immortality) という主人(Master) に見守られる僕(slave) たる人間存在にとって、「避けがたい軛」(the inevitable yoke) たる「現世の重荷」(her earthly freight)、「慣わしの重み」(custom with a weight)、「自己の本性に背く自我の重荷」(the burthen of my own unnatural self) については「この不可思議な全世界の重苦しい重荷」(the heavy and weary weight Of all this unintelligible world) のもつ根源的な属性を象徴的に示現するものであると観ずる想念——ワーズワスにみられるこれら二つの想念にあらわれた、霊性と肉性(重力) における神と人間との父子・主僕という二重の関係の表裏一体性が、パウロの思い、ひいてはイエスの思いにあった神と人との父子・主僕観の一体性をふまえたうえでの、ワーズワス独特の思想体験であることが、うかがい知れるのではなからうか。

- (4) このような重力と霊性との相対もしくは相称的關係といえは、C・S・ルイスは、『キリスト教そのもの』(C.S. Lewis: *Mere Christianity*, 1952) の冒頭の一章で、人間の肉体が石や木とともに重力という自然の物理

的法則に支配されている、ちょうどそのように、人間の魂は本来の意味での人間性の生来自然の法則 (the Law of Human Nature) — すなわち、善なるものを、たとえ裏切ることがあるにしても、窮極的には志向し、希求せずにはおれない生来の内的衝迫 — によって律せられていて、その内的衝迫の根源に神の心が、あたかも重力のように、力、導き (a Power, a Guide) として存在しているという主旨を説いて、そこからその恩寵論を展開している。^⑧ ルーイスはその自叙伝の表題『喜びにおそわれて』(Surprised by Joy) をワーズワスのよく知られたソネットの初行から採っているのをはじめとして (もともと Joy は夫人の名でもあったが)、さきの「石や木」(a stone and a tree) とともに人間の受ける重力の働きという想念も、「ルーシー詩篇」の「敵^{いぐさ}や石や木々とともに」(With rocks, and stones, and trees) の余韻を響かせているなど、ワーズワスの詩句への言及も少なくない。のみならず、ルーイスは、当面の鳥の巣掠りの少年が「低い息づかいの迫り迫るのをきいた」(Low breathings coming after me) のが、「ガーウェインと緑衣の騎士譚」(Sir Gauvain and the Green Knight) の巨人たちがガーウェインを追って来たのと同じイングランド西北部の寥々たる山あいの自然であったことについても短評を残して、『序曲』の少年の幼少体験にも深い関心をいだいていたことが、当然とはいえ、うかがえるのであるが、^⑨ あの一章を書いたルーイスの念頭に、『序曲』をはじめ、ワーズワスの作品にしばしばあらわれる重力と霊性との相対あるいは相称観が、多少とも想起されていたのではなからうか、と思われる。

しかし、ルーイスの念頭に、より近く濃い影を投じていたかもしれないと考えられるのは、ルーイスの書より数年早く世に出た書で、同じく重力を神の恩寵との関係において鋭くとらえたシモヌ・ヴェーユの遺稿『重力と恩寵』(Simone Weil: *La Pesanteur et la Grâce*, 1948) であろう。周知のように、ヴェーユは同書の中で、人間の肉体を地上に引きつけている重力と類似の法則が、人間の魂の生来自然の働き (les mouvements natu-

rels de l'âme) にも作用していて、こうした重力の重圧から人間の魂を救いうる唯一の力は、恩寵、すなわち、天から地上に、また地上から天に向かって二重に働く恩寵の力であるという主旨の、深い洞察につらぬかれた断想を、溢れやまぬ泉のように、書き綴っている。ここでは、そのうちのわずか数節をあげてみよう。^②

魂の生来自然の動きはすべて物理的な重力の法則と類似の法則によって支配されている。ただ恩寵だけは例外である。

(Tous les mouvements naturels de l'âme sont régis par des lois analogues à celles de la pesanteur matérielle. La grâce seule fait exception.)

一二の力が宇宙を支配している。光と重力と。(Deux forces régissent sur l'univers : lumière et pesanteur.)

リリア王、重力の悲劇。およそ「低俗」とよばれるものはすべて重力による現象である。それに、「低俗」という言葉そのものがそのことをあらわしている。(Lear, tragédie de la pesanteur. Tout ce qu'on nomme bassesse est un phénomène de pesanteur. D'ailleurs le terme de bassesse l'indique.)

重力は下降させる。翼は上昇させる。どんな翼の力が二乗されたとしても、重力によらずに下降させることができないか。(La pesanteur fait descendre, l'aile fait monter : quelle aile à la deuxième puissance peut faire descendre sans pesanteur ?)

創造は、重力による下降作用と恩寵による上昇作用、それに二乗された恩寵による下降作用から成り立っている。(La création est faite du mouvement descendant de la pesanteur, du mouvement ascendant de la grâce et du mouvement descendant de la grâce à la deuxième puissance.)

恩寵 それは下降運動の法則である。(La grâce, c'est la loi du mouvement descendant.) (以上、書名と同名の冒頭の章より)

秤として、梃子としての十字架。降ることは昇るための条件である。地上に降りてくる天は、地を天に昇らせる。(Croix

comme balance, comme levier. Descente, condition de la montée. Le ciel descendant sur terre soulève la terre au ciel.)

梔子。上げたいと思うときには下げなければならぬ。(Levier. Abaisser quand on veut élever.)

全宇宙がわれわれの上にのしかかってくるとき、それに対抗しうる重みは神をおうてはならぬ。(Quand l'univers pèse tout entier sur nous, il n'y a pas d'autre contrepoids possible que Dieu lui-même.) (以下「釋と梔子」の章46)

一重の下降運動。重力が行なうことを愛によってもう一度やり直すこと。(Double mouvement descendant: refaire par amour ce que fait la pesanteur.) (以下「美」の章47)

最初の一節にあるヴェーニの「魂の生来自然の動き」(les mouvements naturels de l'âme) の 'naturel' と、ルイスの「(人間性の) 生来自然の法則」(the Law of Human Nature) の 'nature' や、ワーズワスの「生来自然(へ)の敬愛」(natural piety)、あるいは「自らの本性に背く自我の重荷」(the burthen of my own unnatural self) の 'natural' との意味の内包には、対立的といつてよいほどの違いがあるように、上の数節からうかがえるヴェーニの鋭く解析的な重力・恩寵の相對觀と、ルイスやワーズワスのそれとの間には、少なからぬ相違があるのはいうまでもない。また、広遠な思想的伝統と稀有な靈性につちかわれたヴェーニの奥深い思想の詳細にいま立ち入る用意はもとよりないが、しかし、三者の重力觀、恩寵觀は、ともに、本質的には同一の根源的な問題をめぐっての思索・觀照であるといえよう。根源的というのは、『ヨハネ伝』(八章二八)の「あなたがたは、人の子を上げたときにこそ、私があの方であることを悟るであろう」(When you have lifted up the Son of man, then you will know that I am He.)、あるいは同じく(一二章三三)の「私は地上から上げられるときに、すべての人を私のもとに引き寄せるであろう」(And I, when I am lifted up from

the earth, will draw all men to myself.) などの章句に象徴的にみられるように、人の子として受肉した神は、自ら十字架という重荷を背負い、自らの肉体の重荷を十字架に上げるといふ受難をとおして、創造に内在する重力という法則、軛の不可避性と重苦しさを、そしてその重力と表裏一体をなす恩寵の超絶性を、身をもって示顯しているからである。

ヴェーユは、そういう恩寵の働きを二重の相において観照している。すなわち、上の『ヨハネ伝』一二章三二の「私は地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとに引き寄せるであらう」という一節の「地上から上げられる」(lifted up from the earth) という句が、同じく八章二八の「人の子を上げたとき」(When you have lifted up the Son of man) という句と呼应して、十字架に上げられるという受難の意味と、その受難を通して天に上げられるという復活の意味とを、同時に含意しているのと相称的に、ヴェーユにおいては、人間の靈魂をその出自・根源たる「神のもとに引き寄せる」恩寵の上昇作用と、それを成就するための神の受肉・受難に顕現される最高度の⁽²⁾（二乗の）恩寵の下降作用、すなわち、さきのヴェーユのいま一つの言い方をかりれば「重力によらない下降作用」といふ、二重の相をもつ動き(mouvement)として恩寵が観照されている。

ところで、上にあげた数節からも察せられるように、ヴェーユは重力を指す言葉として、*'la grâce'* と美しい頭韻をふむはずの *'la gravité'* または *'la gravitation'* という、より科学的な意味の内包をもつ言葉を用いないで、終始 *'la pesanteur'* を用いているが、それは、この言葉には、「生気のなき、重苦しさ」(*manque de vivacité; sensation pénible de poids*) という意味の陰影があるのを考慮してのことであらうか。⁽⁴⁾ そして、それによって、「全宇宙がわれわれの上のしかかってくるとき、それに対抗しうる重みは神をおいてはない」といふ、その宇宙の重苦しさを象徴的に暗示し、恩寵との対照性を示唆しようとしたのではなからうか。とすれ

ば、ワーズワスが、一方では「重力」(gravitation)を「父子の絆」(the filial bond)の一端として観じながら、他方では、「自らの本性に背く自我の重荷」(the burthen of my own unnatural self)、「霜のように重く、ほとんど生命のように深い慣わしの重荷」(custom... with a weight, Heavy as frost, and deep almost as life)、「魂にのしかかる現し世の重荷」(her earthly freight)ひいては「この不可思議な全世界の重苦しい重荷」(the heavy and weary weight Of all this unintelligible world)「これらすべての重荷を、窮極的には「神秘の重荷」(the burthen of the mystery)として感知した心には、ヴェーユのそれに多少とも通ずるものがあるように思われる。

さらに、ヴェーユにおける恩寵の光と重力との相對観には、ワーズワスの「不滅の靈性」(Immortality)たる「日の光」(the Day)、「われらの觀照を司る主たる光」(the master light of all our seeing)と「僕」(slave)の「軛」(the yoke)たる「魂にのしかかる現し世の重荷」、「慣わしの重荷」との相對観に通ずるところがあるといえよう。

いうまでもなく、重力と靈性、重力と恩寵との相對観の問題は、より広い背景の中でとらえることによって、より豊かで深い意味を開示する問題であり、それに立ち入る用意はむろんないが、上にみたようなワーズワスの重力と靈性との相對観、ヴェーユの重力と恩寵との相對観の背景には、ヴェーユの「秤と挺子」の章の別の一節にも言及されている聖金曜日の聖歌「王の御旗」(Vexilla Regis)の一節の「幸いなるかな…そなた(十字架)は、(主の)肉体の秤りとなりて、悪魔の戦利品を取りもとしたり」(Beata... Statera facta corporis, Tuliqne praedam tartari.)という言葉にもみえる、全世界の重荷を負うたキリストの肉体の重みとそれを受けとめる恩寵の力、という古来の思想がひかえていたことはいうまでもないであろう。また、より周知の想念としては、幼

児として臨在したキリストを背負って河を渡り、全宇宙の重みを感知したと伝えられる聖クリストファ、すなわち、クロードルが「キリストを運ぶ者たる聖霊の鳩」という意味をこめて『クリストファ・コロンブスの書』（*Le Livre de Christophe Colomb*, 1927）を書き添いの重要なモチーフの一つとなったといわれる St. Christophoros（Christ-fero）の故事のはらむ思想も、それぞれの背景にひかえていたと思わなければならないであろう。そして、ワーズワスの「この不可思議な全世界の重苦しい重み」、「神秘の重荷」という観照体験も、あの聖クリストファの故事の象徴的意味を、多かれ少なかれ、ふまえているのではなからうか。

さらにまた、それほど直接的類似性はないと思われるが、しかし、同じく重力と恩寵をめぐる観照を歌ったリルケのよく知られた、忘れがたい短詩「秋」（*Herbst*）^⑧も、広遠な背景の一端であろう。

Die Blätter fallen, fallen wie von weit,
als welken in den Himmeln ferne Gärten;
sie fallen mit verneinender Gebärde.

Und in den Nächten fällt die schwere Erde
aus allen Sternen in die Einsamkeit.

Wir alle fallen. Diese Hand da fällt.

Und sieh dir andre an: es ist in allen.

Und doch ist Einer, welcher dieses Fallen
unendlich sanft in seinen Händen halt.

木の葉が散り、落ちる、遠いかなたからのように、
天の遙かなる園そとが枯れたかのように。

木の葉は否むような身振りで散り、落ちる。

そして、夜な夜な、重い大地は

ありとある星々のなかまから孤独の中へ落ちてゆく。

われらはなべて落ちる。ここなるこの手も落ちる。

そして他のものたちを見るがいい。落下はすべてのものの定め。

だが、この落下を限りなくそうと

その両手に受けとめている独りなる方かたが在る。

この詩には、ヴェーユの重力観における、人間の靈肉を低俗化させる重力の重苦しさ、あるいはワーズワスの「この不可思議な全世界の重苦しい重み」(the heavy and weary weight Of all this unintelligible world)という重圧感は、一見それほどあらわにはみられないように思われる。が、しかし、「天の遙かなる園そとが枯れたかのように：否むような身振りで散り落ちる」という詩行には、いうまでもなく樂園喪失の暗喩が読みとれようし、その暗喩を受けて、天使の仲間からのルーシファの脱落を暗喩するかのような詩行の「この重い大地は星々のあいだから孤独の中へと落ちゆく」(Und... fällt die schwere Erde aus allen Sternen in die Einsamkeit)という観照には、やはりこの詩独自の重力感があらわれていて、それは、同じ時期(一九〇二年頃)の別の詩「隣人」(Der Nachbar)の一節の「人生は万象の重みより重し」(Das Leben ist schwerer als die Schwere von

allen Dingen.)^⑧ という想念とあわせみると、やはりワーズワスの「この不可思議な全世界の重苦しい重み」、「魂にのしかかる現し世の重荷」に通ずる思いを内包していることを示唆している。

また、この詩の「重い大地は：孤独の中へ落ちてゆく」というその「孤独」(Einsamkeit) は、むしろそれを受けとめる「一者」(Einer) の超絶的な孤独と照応していて、ワーズワスにおける人間の孤独な霊と、自然に臨在する「永遠の思惟たる霊」の超絶的な孤独寂寥との照応を想起させずにはおかない。

しかし、よりいっそう心をひかれるのは、冒頭の木の葉の暗喩から察せられるように、重かるべき大地の落下、万象の落下を、木の葉を受けるように「限りなくそうと」(unendlich sanft)、あのヴェーユの言葉を用すれば「重力によらない下降」であるかのように受けとめる「独りなる方^{かた}の両手」という想念には、（その一者が正統の神とかなりくいちがうものであるうとも）、恩寵の超絶的な力が暗示されているということである。そして、ワーズワスにおいても、自然の事物が（少年の）「思惟の中へと落ちゆき、消えゆく」という、やはり、「そうと」受けとめられる落下、というよりは降下の情感をともなう観照が広がりゆくきわみにおいては、エノクやエリアは「永遠の思惟」の中へとそうと落ちゆくのであり、あるいは、「大地の日ごと日ごとの運行に帰一して、敵^{いわね}や石や木々とともにめぐりめぐっている」ルーシも、同じくその「永遠の思惟」の中に重い大地ごとそうと受けとめられて在るのだという観照にまでいたる、と考えることが許されるならば、この「秋」における「重い大地」とそれを受けとめる「一者」という想念は、広遠な背景の一端として、ワーズワスの重力と霊性、もしくは恩寵をめぐる観照とまったく無関係とはいえないのではなからうか。（つづく）

補遺

本文中でひとことふれておいたA・E・ハウスマンの抒情詩のほとんどは、周知のように、古今の多くの詩人たちの影響

をとどめているなかで、ワーズワスからも目立たないが少なからぬ影響を受けていて、たとえば「立ちさわぐ森を吹きぬける風のように、生命の疾風が彼の中を烈々と吹きぬけていった。人という木は静まることはない」(There, like the wind through woods in riot, Through him the gale of life blew high: The tree of man was never quiet. — *A Shropshire Lad*, XXXI) には、ワーズワスの「音楽の力」(*Power of Music*, l. 36) の「音楽は木を吹きぬける風のように、彼のうちに立ちそなうだ」(The music stirs in him like wind through a tree.) の余韻がききとれるのもその一例であるが、そのハウスマンの「遠いかなたから、夕べ、はた朝の方から、十二の方の風吹きかよう空の果てから、わが身を結ぶ生命の素が吹きよせて、ここに私は在る」(From far, from eve and morning, And you twelve-winded sky, The stuff of life to knit me Blew hither: here am I. — *A Shropshire Lad*, XXXII) という第一聯で始まる詩は、わずかに十一行の短詩ながら、ソフォクレスはか古典の余韻にみちみちているが(田田・玉木両氏編注 *A Shropshire Lad* (青山書店)、参照) 結びの第三聯の「さあ、言ってくれ、応えよう、どうしたら力になれようか。吹く風の十二の方にむけて、私が(散りぢりになって)果てしなき旅路に立たないうちに」(Speak now, and I will answer; How shall I help you, say; Ere to the wind's twelve quarters I take my endless way.) からも察せられるように、時空の果てから吹き来り、吹き去る生命の素が束の間に結ぶ今生の孤独な魂(anima-spirit-wind)の眞の触れ合いを希求するというモチーフと結びの「果てしなき旅路に出で立たないうちに」(Ere... I take my endless way) という詩行は、「西におもむいて」(*Stepping Westward*)のモチーフの一端と結びの詩行をみごとに自家の詩想に同化している。そして、両詩の結びの「果てしなきわが道」の文脈をみると、ハウスマンの場合は、今生と死後の世界との間に明らかに境界があって、「果てしなき道」はその境界を始点としていられるにたいして、ワーズワスの「果てしなくつづくわが道の行く手の世界を通じて」(*travelling through the world that lay Before me in my endless way*)の道は、今生も後の世も包攝する無辺無窮の世界を一貫する道であることが、よりいっそう明らかになるのではなからうか。「秀れた宗教詩を最も正しく、深く味いするのは、おそらく非信徒であらう」(*The Name and Nature of Poetry*, p. 34) にいう警句を発し、T・S・エリオットをし

て「この言葉には一抹の厳しい眞理がある」(*The Use of Poetry and the Use of Criticism*, p.95)といわしめたことのあるハウスマンは、「(「西におもむいて」が宗教詩だというわけではないが、)ハウスマスの「果てしなき道」の眞意を充分に理解した上で、完全に同化したものと思われる。

注

- ① Christopher Salvesen: *The Landscape of Memory*, (Edward Arnold), p. 118.
- ② *The Poetical Works of William Wordsworth*, ed. de Selincourt vol. 4, pp. 463-464.
- ③ *Ibid.*, p. 467.
- ④ 「Glee'. 「歓び (の歌)」という言葉の復活について (オックスフォード・ワーズワスの『一八〇七年詩集』を中心に) (『英文学評論』第二十六集、五七一—五八頁)
- ⑤ Thomas Traherne: *Centuries, Poems and Thanksgivings*, ed. Margolious, Oxford, vol. 2, pp. 50-56.
- ⑥ Letter to B. Bailey, 22 Nov. 1817 (M. B. Forman's edition, p. 67)
- ⑦ T. S. Eliot: *Selected Essays*, (Faber and Faber) p. 262.
- ⑧ John Jones: *Keats's Dream of Truth*, (Chatto and Windus) p. 11.
- ⑨ *The Prelude*, ed. de Selencourt, (Oxford English Texts), p. 524.
- ⑩ 「Glee'. 「歓び (の歌)」という言葉の復活について (オックスフォード・ワーズワスの『一八〇七年詩集』を中心に) (『英文学評論』第二十六集、六九—七〇頁)
- ⑪ *Poems by William Wordsworth*, ed. Edward Dowden, (The Athenaeum Press Series, 1897) p. 431.
- ⑫ David Perkins: *Wordsworth and the Poetry of Sincerity*, (Harvard U. P.) pp. 200-201.
- ⑬ *The Poetical Works of William Wordsworth*, ed. de Selincourt, vol. 3, p. 444.
- ⑭ *The Century Dictionary* 参照。

- ⑤1 「Glee: 「歓び (の歌)」という言葉の復活について (その二) ワーズワスの『一八〇七年詩集』を中心に」(『英文学評論』第百十六集、六〇一-六八頁)
- ⑤2 *The Poetical Works of William Wordsworth*, ed. de Selincourt, vol. 4, p. 523.
- ⑤3 Letter to J. H. Reynolds, 3 May, 1818 (M. B. Forman's ed. p. 139), and Letter to J. H. Reynolds, 21 Sept, 1817 (*Ibid.* p. 47)
- ⑤4 S. T. Coleridge: *Biographia Literaria*, ed, Shawcross, vol. 2, pp. 111-112.
- ⑤5 *Dictionnaire des Proverbes, Sentences et Maximes*, ed. Maurice Maloux, (Larousse) p. 310. なお、この格言の存在については、幸兄阿部哲三氏の「A・マントーリイの「帯」La Ceinture を如何に詠むか」(京都工芸繊維大学工芸学部論集「人文」第百十六号、一五頁)に教えられるところがある。それを申しあげる。
- ⑤6 C. S. Lewis: *Mere Christianity* (Fount Paperbacks, Collins), pp. 15-16; 32-35, etc.
- ⑤7 C. S. Lewis: *Of Other Worlds, Essays and Stories*, ed. Walter Hooper (A Harvest H. B. J. Book) pp. 8-9.
- ⑤8 Simone Weil: *La Pesanteur et La Grâce*, (Librairie Plon) pp. 11, 13; 97, 98; 151.
- ⑤9 マーサンの「二乗の」という概念の整合性は、必ずしも精確には把握したいが、“à la nième puissance”(極度に最高に)という成句の意味を念頭におうて用いられているのではなかと思う。
- ⑥0 Dictionnaire: *Le Petit Robert* 参照。
- ⑥1 R. M. Rilke: *Sämtliche Werke*, Bd. 1. (Insel Verlag) p. 400.
- ⑥2 *Ibid.*, p. 392.